

Living the Lotus 11

Buddhism in Everyday Life

2023

VOL. 218



赤嵌楼（台湾国定古跡、台南市） / Shutterstock

立正佼成会 台南教会

Living the Lotus Vol. 218 (November 2023)

【発行】立正佼成会 国際伝道部

〒166-8537

東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F

Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224

E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp

編集責任者: 赤川 恵一

編集チーフ: 三川 紗知

校閲者: 小坂 和正、菊池 克之

編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鑽会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教)というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

愚痴はほどほどに

立正佼成会会長 庭野日鏡



「知」が「病む」と「痴」になる

今年の夏は災害級の暑さといわれましたが、そうでなくても、夏には口を開けば「暑い、暑い」と文句をいい、冬になると寒さをぼやきがちな私たちです。一般的に、このような天地自然のありようや過去のできごとなど、「いっても仕方がないことをいって嘆く」ことを「愚痴をこぼす」といいます。みなさんは、「いっても仕方がないことをいう」と聞いて、どのようなことに思い当たるでしょうか。

日ごろの愚痴の数々とともに、私はこの言葉の、とくに「痴」の文字の組みあわせがおもしろいと思っています。ものごとを理解し判断する能力としての知性、それを支える知識や知恵、そうした「知」が「痴」に囲まれた状態です。つまり、「知」が「病」にかかっているから「愚痴をこぼす」と受けとれるのです。

ところで、人間には、ものごとを考えて行動できる知性が具わっているといわれます。理学博士の佐治晴夫さんは、人間は宇宙にある水素や炭素などと同じ物質の素からできているとしながらも、モノとしての物質ではなく、「自分で考え、行動し、相手と気持ちを分かち合って、助け合いながら生きている、不思議な存在」(『14歳のための時間論』春秋社)が人間だといっています。それは、人間に「未来のことや他者のことを、想像したり、推測したりできる能力」=心があるからだということです。

しかし私たちは、その同じ心で自己中心の欲望や怒りをつのらせ、自他を苦しめる愚を繰り返します。心が、愚痴の病に冒されるのです。では、自分勝手な欲望や怒り

が暴走しないようにするには、どうすればいいのでしょうか。愚痴の病を癒やすには、何が大切なのでしょうか。

愚痴を聴かせてもらおう

先の佐治晴夫さんの言葉を思い出してみてください。せっかく他者と協力したり人を思いやったり、未来を想像し、推測できる能力を具えている私たちなのですから、それを発揮すればいいのです。わがままな心が出そうになったら、ものごとを多面的に見たり、他者の心中に思いをめぐらせたりする。あるいは、「愚痴の病には縁起観を教える」と涅槃経にあるように、自分があらゆるものに生かされていることを知り、そのイメージをふくらませてみる。そうして少しでも感謝の生活ができれば、愚痴はおのずから減ってくるはずです。

縁起ということでは、たとえば家庭において、親がいつも不平不満や人の悪口をいっていると、子どももそれに影響されて何かにつけて文句が多くなるという研究結果があるそうです。周囲の人の愚痴を呼び起こす縁になるのか、智慧が目ざめる縁になるのか。私たちの心のあり方一つで、それもまた変わるのです。

ただ、だからといって愚痴をいっさい口にしてはならないとなると、それもまた窮屈です。欲や怒りにふり回されてはいけませんが、やるせない気持ちで吐く愚痴や弱音は、ときに必要なものかもしれません。それが、やがて「いっても仕方がないことにとらわれるのはやめよう」と自ら気づき、考え、新たな気持ちで前を向く出発点になることもあるのです。

だとすると、人さまの愚痴を聞かせていただく受け皿のような私たちであることも大切だと思うのです。

いつも愚痴を聞かされるのはたまらないという人もいそうですが、思いやりをもって、相手のつらい気持ちを聴ききる、弱音を吐いてもらおう。そうして人生の突破口となる「智慧の心」をいっしょにさぐるなか、お互いの心の健康と元気と、人間的成長があるのです。

(『佼成』2023年11月号)



Spiritual Journey

佼成会で学んだ仏教の日々の実践

金蓮淑
韓国立正佼成会

この体験説法は、2023年5月27日にソウルの韓国立正佼成会で行なわれた「降誕会」式典で発表されたものです。

皆さま、よろしくお願いいたします。「降誕会」のよき日に説法のお役をいただき、誠にありがとうございます。私は釜山支部の金蓮淑(キム・ヨンスック)と申します。

私は1955年4月9日、慶尚北道の永川市で八人きょうだいの三女として生まれました。今年で68歳になります。

23歳の時、私は夫と見合い結婚をしました。私たち夫婦は共にカトリックの信者で、教会の奉仕活動に参加しながら幸せな生活を送っていました。夫は40代前半に家電メーカーの代理店を始めました。商売は順調に進み、仕事関係での飲み会も増えました。夫は寡黙で優しい人でした。しかし、夫がお酒を飲んで帰って来た日には、私たちはよく夫婦喧嘩をするようになり、喧嘩の回数は日毎に増えていきました。私はプライドが高く、夫から一言不満を言われると、二倍三倍にして言い返し、喧嘩をした日のあとは夫が帰宅しても挨拶さえしませんでした。やがて夫は会社の経理担当の女性と関係を持つようになり、私に離婚を要求してきました。カトリック教徒だから離婚はできないと言い、また二人の子どもを結婚させるまでは別れられないと主張しましたが、言葉にできないほど惨めな気持ちでした。

そんな中、夫の会社の経営がうまくいかなくなり、借金を抱えて会社は倒産しました。夫はその後肉体労働をして収入を得ていましたが、ある日脳出血で倒れ入院しました。娘の結婚式の一週間前のことで、娘は父親不在のまま結婚式を挙げなければなりませんでした。後遺症で体が不自由になった夫のリハビリのため、私は毎日お弁当を作り、夫と一緒に

に山登りなどの運動をして、一生懸命に介護しました。その結果、夫の体は一年ほどで回復し、翌年には息子の結婚式に出席することができました。

夫はその後工事現場などで働いていましたが、収入を家に入れてはくれませんでした。そのため、私はアルバイトを始めましたが、夫との心の溝は広がるばかりでした。子どもたちはそれぞれ自立して家庭を持っていましたので、2010年、私はついに離婚届けに判を押しました。そのためカトリックの教会には行けなくなりました。

一人で生活をしていくために、私は銭湯の売店でアルバイトをしていましたが、そこであるお寺の法師さまに出会いました。法師さまからは「あなたの家庭がこんな目に会ったのは、ご先祖さまのお墓の状態が良くないからよ。毎日三千ウォンずつお布施を



ソウル市内にある韓国立正佼成会で行なわれた「降誕会」式典で説法をする金蓮淑さん

し、三年間祈願供養を下さい」と言われました。その後、2013年に私はこの法師さまのお寺の供養主（寺の食事の世話をする在家信者）となりました。法師さまは、最初は母親のように暖かく優しく接してくれました。

私は毎朝七時にお寺に行って法師さまの食事の準備をし、その後はお寺の庫裏の仕事に従事しました。お堂での仕事などを含めると、一日中休む暇はありませんでした。法要やお寺の行事の日には家に帰れないほど忙しく、自分がしていることが修行なのかどうか分からないまま、お役に追われる毎日でした。

私は仕事で疲れ、さらに加齢による膝の痛みが激しくなりました。病院で手術を勧められましたが、法師さまから「手術をしたら一生歩けなくなる」と言われ、手術を受けるのを止めました。さらに「夫と復縁したらあなたは死ぬ。あなたは運のない女だから、このお寺を出たら子どもたちも孫たちも、ものごとがうまくいかなくなり、やがて家が滅びる」と、呪いのような言葉をかけられました。修行を重ねてきた法師さまの言うことだけに、恐れを感じずにはいらませんでした。愛する家族のためなら自分が犠牲になろうと、心を決めて頑張りましたが、しまいには膝の痛みで歩くこともできなくなったため、私は手術を受けることを決め、供養主を辞めてお寺を出ることにしました。

それからは、法師さまの言葉どおりに、私がお寺との縁を切ったことで本当に家に不幸が起きたらどうしようと、不安で眠れない日が続きました。法師さまが私の名前を呼ぶ声が幻聴として聞こえてくるほど恐怖も感じていました。そんな時に思い出したのが、いつも暖かく接してくださっていた李英順（イ・ヨンスン）さんでした。李さんはソウル市内の韓国立正佼成会城北支部の副支部長をされていて、李さんの義理のお父さまと私の父が友達同士だったこともあり、私をとってもかわいがってくださいました。

李副支部長さんの家に一週間ほど泊めていただきながら、心の中に溜まっていた悩みを思い切り打ち明けることができ、私の気持ちはとても楽になりました。膝の手術を受ける前に、李副支部長さんのお導きで韓国立正佼成会に入会し、釜山支部に所属して総戒名のお祀り込みをしていただきました。手術後、コロナ禍で自宅に籠っていたとき、ご供養の仕方を李副支部長さんから教えていただき、お祀り込みのときにいただいた経典をゆっくりと読ませていただきました。ご供養を始めて二日目、胸の中に何か熱いものが飛び込んできたかと思うと、経典に書かれている仏さまのお言葉が心にスッと入ってきました。心の中に何かこみあげて来るのを感じました。それは「仏さまの教えのとおり生きて行けば大丈夫」という安心感でした。次の日から毎朝六時にご供養をさせていただくと、恐怖心が消え、夜も眠れるようになりました。

膝の手術を受けて一年後、ようやく釜山支部に参拝をすることができ、また初めて李幸子教会長さんのご講話もお聴きすることができました。それまで「感謝すること」の大切さについて、教会長さんから直接お話を伺うことがなかった私にとって、「今ここに自分が生きていることは有り難いこと。すべての人やものごとのお陰さまで、生かされて生きている」という教会長さんのお言葉に、目の覚める思いがしました。「朝、目が覚めることに感謝、呼吸する空気に感謝、太陽にも感謝。この世には感謝することばかり。感謝の気持ちを持ち続けると、その果報として、さらにまた感謝することが巡ってくる」というお言葉は、私に仏さまの教えをとっても分かりやすく教えてくださるものでした。その時、私は「この教えを実践して行こう」と心に決めました。

結婚後オーストラリアで暮らしていた娘が帰国した際、別れた夫と私の橋渡し役をしてくれて、私は再び夫と一緒に暮らすようになりました。脳出血の後遺症で部分的に記憶を喪失した夫は、浮気をし

ていたことすら覚えていなかったため、離婚の原因のすべては私にあると思い込み、私のことを責めていたことも知りました。そのため、さまざまな紆余曲折がありましたが、その後夫と再び籍を入れ、今年で八年目を迎えました。

最近、道場から帰宅すると、夫が「今日はお寺で何を学んだの？」と質問してきたので、「主人に優しく、温かく接することを学びました」と、私は答えました。すると、夫は次の日も「今日は何を学んだの？」と聞いてくるのです。「ご主人を愛しなさいと教えていただきましたよ」と答えると、「ほう、そこは本当に良いお寺だね。頑張ってるって嬉しいな」と言うので、可笑しくて夫と一緒に笑ってしまいました。

最初のうちは、夫に挨拶をすることがなかなかできず、私はトイレの鏡に向かって「おかえりなさい」「今日もお疲れさまでした」と言葉をかける練習をしました。少し気恥ずかしかったのですが、夫の頬をなでながら挨拶をすると、夫は動揺して「えっ、どうしたの？」と言いながらも、嫌がりはしませんでした。そのためか、夫も佼成会が好きになりました。年に一度は総供養をさせていただくことを二人で約束し、その時は感謝の気持ちでお布施をさせていただこうと、毎月一緒に貯金をしています。

私は今、娘の友達の小学生の子ども二人を、放課後にお預かりしています。その八歳と六歳の子どもたちに、佼成会で学んだ「三つの実践」を一つひとつ伝えていきます。「挨拶をする、履物を揃える、人に呼ばれたら『はい』と返事をする」という三つの実践と、「感謝を言葉で伝える」ことの大切さを子どもたちにお話しすると、二人はすぐに実践するので、そんな子どもたちの姿はとても微笑ましく、二人のお陰さまで私自身が元気に生きていく力をいただいています。

私だけ幸せになるのは、本当にもったいなく申し訳ないという気持ちで、以前通っていたお寺で出

会ったAさんに電話をかけました。「最近、仏さまの教えを生活の中で実践する方法を教えてください。お寺に通っているけど、私だけ聞くのは本当にもったいないご講話なのよ。一緒に聞いてみない？」とお誘いし、今まで教えていただいたことを少しお分けすると、Aさんはすぐに「私も一度行ってみたい」と言ってくださいました。

Aさんの夫は真面目に働いたことのなかった人で、そのためAさんは家計のやりくりで苦勞していました。Aさんは介護士をしていますが、少し頑固なところもあり、自分の思いどおりにならない状況に不平不満が溜まっているようでした。その胸の内をありのまま聴かせていただくと、Aさんの気持ちは落ち着いて、「金さんと出会えて本当に幸せ。私が悩みを話すと、大抵の人は解決法を教えようとするけれど、金さんはいつも私の気持ちを全部聞いてくれるでしょ。そんな人は今までいなかった」と、感謝の気持ちを伝えてくださいました。人から何かしてもらったことが当たり前で、そうでないと寂しく不満に思う私でしたが、Aさんとのご縁をとおして、どんなに小さなことにも感謝できるようになりました。ものごとを感謝で受けとめると、自分の気持ちも人間関係も楽になり、毎日が楽しくて幸せです。



釜山支部道場でご主人の崔達柱(チェ・ダルジュ)さんと

83歳を迎えたAさんの母親は、つい最近腕にけがをして手術を受けました。Aさんを含め、今まで母親に頼りきりだった子どもたちは途方に暮れ、母親の看病のことでお互いに不平不満を言い合っていました。そんな時、「お母さんからいただいた愛情を、少しでもお返しできるチャンスね。他のきょうだいはともかく、まずAさんが親孝行をさせていただこうね」と、佼成会で学んだとおりにお伝えしました。すると、Aさんは「そうね。母は今までずっと私たちのために頑張ってきてくれた。母に感謝しなくては」と、母親の愛情を当たり前のように思っていた自分の心を反省し、それからは心を込めてお母さまの看病をされています。

私の家では、息子も娘も佼成会に入会をし、二人とも総戒名のお祀り込みをしていただきました。息子は今まで一度も問題を起こしたことがない親孝行な子でしたが、最近妹と感情的な行き違いがあったらしく、実家に顔を出さなくなりました。以前の自分なら、お金や欲しいものを与えるなど、どんな手を使ってでも息子を実家に来させようとしたのですが、今は仏さまにお任せして待っています。振り返れば、私自身にも些細なことで連絡が途絶えている姉がおり、夫のきょうだいたちにも離婚後は連絡をしないままになっていることに気づきました。仲たがいでいる子どもたちのことで心を痛めている私のように、私の亡くなった両親も、きょうだいたちと疎遠になっている自分の姿を見たら、同じく心を痛めるでしょう。勇気を出して、きょうだいたちに連絡をしてみようと思います。

お寺の法師さまとの出会いも悪縁ではなく、離婚後に心を切り替えられず迷っていた私が、横道に逸れることのないように守ってくれた有り難いご縁だったのだと、今は恨む気持ちもなく、感謝で受け止められるようになりました。すべてはみ教えのお陰さまです。導きの親の李副支部長さんに、重ねて

感謝の気持ちをお伝え申し上げます。そして、み仏さまの教え、開祖さまのお言葉を、私にお伝えくださっている李教会長さんに心より感謝申し上げます。

ご清聴いただき、ありがとうございました。



まんが 立正佼成会入門

お釈迦さまの生涯と仏教の教え

化城宝処のたとえ

宝のある場所を求めて長く険しい道をおおぜいの人が旅をしています。しかし、つらさから途中で引き返そうとする人もいます。人を導く方法を知っていたリーダーはまぼろしの城をつくり、人びとを休ませながら、ついに宝の場所まで導くことができたのです。

長く険しい道とは、私たちの人生です。リーダーとは仏さま。人生の中でくじけそうになる私たちに、仏さまはいろいろな方法(方便)を示して、教えにそった生き方へと導いてくださるということが、この物語に説かれています。



豆知識

『法華経』「化城論品第七」に説かれているたとえ。仏さまは、私たちすべての衆生を成仏させるための「一仏乗の教え」を「宝」にたとえている。ここでいう「成仏」とは、人格の完成や真に幸福な人生を意味する。



『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。

<https://www.koseishop.com/>

衣裏繫珠のたとえ



豆知識

『法華経』「五百弟子受記品第八」に説かれるたとえ。宝物を親友が縫いつけるのは、私たちの誓願は仏さまのおかげで立てさせていただけることを意味する。「受記」とは「仏になれるよ」という保証のこと。

ある貧しい男性が親友の家に招かれてごちそうになり、眠ってしまいます。親友は、彼の服の裏に宝物を縫いつけます。しかし、彼は宝物に気づかず、その後もあわれなすがたをしています。数年後、偶然に再会した親友から宝物のことを打ち明けられました。親友は仏さま、宝物は「仏になろう」という誓願、親友による打ち明けは彼にとっての「受記」を意味します。

なかなか仏になれなくても、自ら立てた誓願を忘れさえしなければ、私たちは仏さまから受記をいただくことが説かれています。



私がここにいるのは
幸せの輪が広がる

立正佼成会開祖 庭野日敬



「私」という人間の、いまいる位置を確かめようとする、自分は一人で生きているのではないことに思い当たるはずです。

仏教に「諸法無我」という教えがあります。それは「この世のあらゆる現象は、それ一つで単独に存在するのではなく、目に見えない関係でつながり、もちつもたれつしているのである」ということです。

私たちは、多くの人とつながり合っているのです。ですから、隣にいる人を悲しませるようなことをすれば、そのまた隣の人をも悲しませることになります。反対に、一人の人でも幸せにしてさしあげれば、そのまわりの人に幸せの輪が広がるというように、必ず多くの人に影響をおよぼしていくことになります。

こうした横のつながりだけでなく、縦のつながりも大事です。「私がここにいる」のは、両親がいたお陰であって、そのまた両親がいて、代々のご先祖さまがいたお陰さまです。それを思えば、「両親を大切に、ご先祖さまを大切にしよう」という気持ちになって、朝夕のご供養に心がこもってきます。

さらに、仏教徒としては、導きの子から孫へ、孫から曾孫へと続く縦のつながりも忘れてはなりません。もし、あなたの導きの子がよい導きの孫を育て、それがまたよい曾孫を育てるならば、「法」は幾世代にもわたって継承され、生きていくわけです。

仏さまの寿命は永遠であることが「如来寿量品」に説かれています。もちろん、「久遠実成の本仏」の寿命は永遠であるというのが本義ですが、さらに、宇宙と人生の真実を説く仏法も永遠不滅である、という意味でもあると考えていいでしょう。

お経文に、「常に此に住して法を説く」とありますが、仏道を行じ、仏法を説く人のなかに、仏さまのいのちは確実に生きています。

「一人が一人を導く」というのも、つまりは、そういう仏法の横のつながりと縦のつながりを作ることなのです。「その大事なつながりの中心に、自分がいる」と思えるようであれば、これほど尊い人間としてのあり方はなく、「私がここにいる」ことの意義の極致であるといっていいいでしょう。



「聴くこと」の大切さ

国際伝道部長
赤川 恵一

皆さま、こんにちは。日本では厳しい残暑がようやく収まったかと思えば、早いもので木々の葉が色づきはじめ、秋の深まりを感じます。自然界の生々流転に感嘆する今日この頃です。

今月は、苦しみの根源である「三毒」の最後の「痴」についてご法話を頂きました。涅槃経には「愚痴の病には縁起観を教える」と説かれていますが、自己中心の欲望や怒りの感情で心が破裂寸前の人に、理路整然と縁起の法を説いてあげても、容易には聞き入れてもらえそうにありません。そこで、会長先生は「愚痴を聴かせてもらう」ことの大切さを教えてくださいています。

「愚痴を聴く」の「聴」という文字には、「願いを聞き入れる」という意味があります。やるせない気持ちや弱音に耳を傾け、「それは辛かったよね」と相手の心に本気で共感し抱えてあげる同悲同苦の応答は、「痴」に蝕まれた人の心に大きな気づきの世界をもたらしてくれるに違いありません。

「三毒」攻略の智慧として「聴くこと」の大切さに気づかせていただき、ともすれば相手の心そっちのけで一方的に理を押し付けてしまいがちな私にとって、改めて心に沁みわたるご法話となりました。

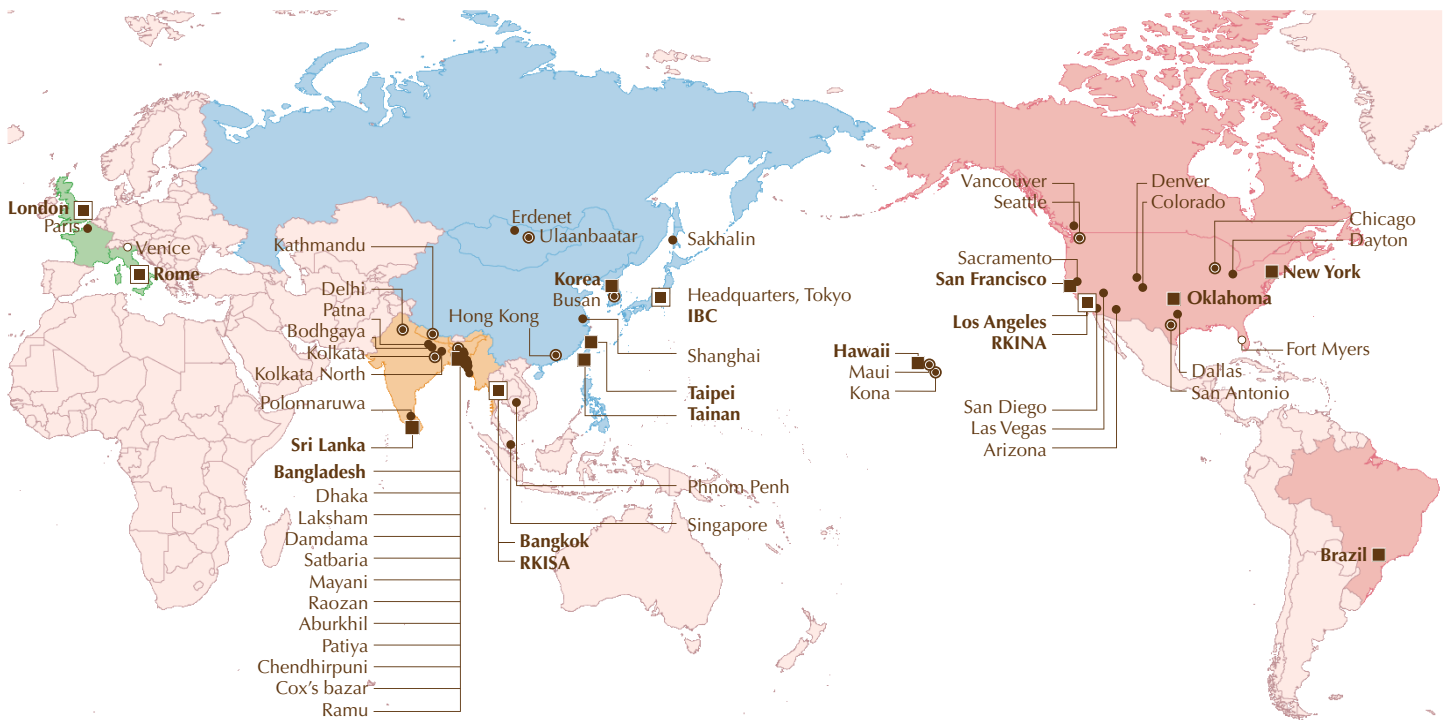


Rissho Kosei-kai International

Make Every Encounter Matter



🌸 A Global Buddhist Movement 🌸



Information about
local Dharma centers

facebook

twitter



✉ Living the Lotus では、皆様のご意見・ご感想を募集しています。
お問い合わせは、以下の E メールアドレスにお願い致します。
E メール : living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp